論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称	博　士　（　教育学　）	氏名	本　岡　　美　保　子
学位授与の要件	学位規則第４条第[1]・２項該当		

論　文　題　目

「子ども－大人」関係における音楽的相互作用に関する研究
－乳児保育における「わらべうた」実践から－

論文審査担当者

主　　査	教　授	七　木　田　　敦
審査委員	教　授	丸　山　　恭　司
審査委員	教　授	山　田　　浩　之
審査委員	教　授	中　坪　　史　典

〔論文審査の要旨〕

本論文は，乳児保育における子どもと保育者であった筆者による「わらべうた実践」を対象とし，「経験的現象学」を理論的枠組みとして，音楽的相互作用によって構築される関係性と，音楽的相互作用に通底する意味を明らかにすることを通して，「子ども－大人」関係における音楽的相互作用の意義について提示することを目的として行ったものである。本研究における音楽的相互作用とは「二者以上の人間が情動を共有し合いながら，雰囲気やその場の空気と呼んでいるような心理的場所〔ここ〕で共存する関係において，一方は情動や，拍及び旋律もしくは抑揚に伴う動きや声を表出し，一方は表出された情動や動きや声を我が事のように受容し理解するというやりとり」のことであり，わらべうたも音楽的相互作用の一つである。

序章では本研究の背景として，子どもは生後すぐから他者との「かかわり合いの領域」を広げながら対人関係を築いていくこと（Stern, 1985；Stern, 2000），対人関係の構築には相互作用が重要であること（Reddy,2008;Legerstee,2005），とりわけ「Communicative Musicality」（Malloch, 1999; Malloch & Trevarthen, 2009）が養育者との関係構築に重要であることを述べた。「Communicative Musicality」は，乳児期後期以降の子どもの音楽的相互作用においても，情動調整や言語発達，社会的発達の鍵になっていることが明らかにされてきたが，関係的な側面からの検討は不十分であったため，本研究では筆者自身の経験をもとに音楽的相互作用における関係性の側面を質的な分析によって解き明かすこと，その際，乳児保育におけるわらべうた実践に焦点化することを述べた。

第１章では，乳児保育の研究及び，保育及び乳児保育における音楽的相互作用やわらべうたに関する研究の成果を概観し，保育者としての筆者の経験をもとに研究することの必然性を述べた。第２章では，自己の経験をもとにした研究において目指すべきものとは何か，研究者の主観性をどう扱うべきか，一事例研究の意義とは何かの三点を検討した上で，自己の経験をもとにした保育研究の批判的検討を行った。第３章では，本研究の理論的枠組みとしてEugene T. Gendlin(1926-2017)による「経験的現象学」を提示し，分析方法であるTHINKING AT THE EDGE（Gendlin, 2004)について詳述した。第４章では，研究対象及

び方法，倫理的配慮を提示すると共に，経験の記述として「エピソード記述」（鯨岡，2013）を採用することを述べた。第５章では，乳児保育における子どもと，保育者であった筆者である「私」のわらべうたをうたい合う経験の質感を示し，音楽的相互作用において構築される子どもと保育者との関係性を，「身を委ねて自由に振る舞い，ポジティブな感情表出が可能となるような関係性」，「周囲の他者を巻き込みながら他者と調和したり，新たに他者との関係を築こうとしたりすることに向かうような関係性」とし，音楽的相互作用に含意される関係性として「悲しみが緩和されたり，あえて感情を崩して負の感情を浄化したりできるような関係性」があると考察した。第６章では，音楽的相互作用に通底する意味を，「子どもが主導権を握り保育者が維持するという関係の中で，互いが音楽性を感じ取り，拍節感に伴う身体の動きを相互に繰り返すことで，子どもに対人関係を構築していくための踏み台や，生きていく原動力をもたらす」ことと，「呼吸を合わせて唱える心地よさや，音楽表現に呼応してもらうといった喜びの実感が，子どもと保育者とのあいだで伝わり合い同期することが互いの関係を強く結びつけるとともに，子どもの対人関係を拡張する」こととした。また顕在化するか否かは対人関係の育ちへの願いや分離への意識に依存するものの，「一対一での身体接触を伴った安心感や心地よさによって精神的な苦痛を緩和し，その子の対人関係の育ちを願うことで互いの分離を受け入れ，保育者が子ども同士の関係の後景に退くことで，子どもが新たな対人関係を構築していくことへと向かっていく」という意味も含意されていることを述べた。

終章では，乳児保育における音楽的相互作用の意義と，「子どもー大人」関係における音楽的相互作用の意義を考察し，本研究の限界を述べた。乳児保育における意義は，音楽的相互作用によって構築される関係性が他者と共に生きていくための力を養うことと，音楽的相互作用が分離を前提とした親密さを築き子どもの対人関係を拡張する可能性があること，「子どもー大人」関係における意義は，音楽的相互作用によって分離が含意された親密さを築くことで子どもの能動性や主導性を高めることができることと，音楽的相互作用が互いに応えようとする思いや対人関係に関わる願いに基づいて「育とう」とする子どもと「育てよう」とする大人を生み出しながら，他者と共に生きていこうとする営みになる可能性があることであると結論づけた。

本論文は，次の３点で高く評価できる。

１．音楽的相互作用が，分離を前提とした親密な「子どもー大人」関係を築くとともに，子どもの対人関係を拡張し，子どもの対人関係の育ちに寄与することを示した。

２．乳児保育において，子どもの能動性や主導性にもとづく音楽的相互作用を行うことの重要性を示し，乳児保育実践や保育者養成教育に対して新たな示唆を与えた。

３．自己の経験にもとづく保育研究のための新たな方法論を確立した。

以上，審査の結果，本論文の著者は博士（教育学）の学位を授与される十分な資格があるものと認められる。

令和　５年　２月　１４日